

# 第11回「日本語大賞」

テーマ「おもしろい日本語」

中学生の部 優秀賞 受賞作品

「『すみません』を使いこなせば」

茨城県

つくばインターナショナルスクール

2年 高木 伸太郎

特定非営利活動法人 日本語検定委員会

「すみません」を使いこなせば

つくばインターナショナルスクール 中学二年  
高木 伸太郎(たかぎ・しんたろう)

僕は、生まれてから八才までタイ王国のバンコクに住んでいた。タイでは、知らない人同士でも目が合うとニコツと微笑みあう。「微笑みの国タイランド」と言われていることにも納得だ。笑顔でいると、周りの人々も笑顔になる。とても良い習慣だ。そんな国から東京に来た僕が、まず驚いたことは、日本人はとても忙しく、無表情なことだ。電車の中で目があうと、微笑むどころか、ものすごい速さで目を逸らす。まるで、見てはいけないものを見たかのように。「微笑みの国」からきた僕は、とても寂しい気持ちになった。人と人との間にもすごい壁が立っているように感じた。

「マイペンライ精神」といわれる、タイ人はおおらかで、なにもものにとらわれない自由な人が多い。タイには「マイペンライ」というタイ語がある。「マイ」は否定を表す言葉で、英語でいうところの「No」や「Not」にあてはまる。「ペンライ」は「問題あり」に近い意味の言葉だ。この二つがあわさるので、「問題ない」とか「大丈夫」という意味になる。他にも、「気にしない」や「気楽に行こう」といった意味も含まれる。タイでは何か失敗した人がいたら、「マイペンライ(気にしないで)」の意味を込めて微笑み、相手を励ます。励まされた人は「ありがとう」の意味を込めて微笑み返す習慣がある。タイが大好きな僕の母は、タイにいたころのように、出発しそうな電車に走って乗ろうとしたが間に合わなかった人がいたので、微笑んだら「不審者扱いされた」と、怒っていた。日本では、何か失敗した時に「鼻で笑われた」という言葉がある。「鼻で笑う」とは、相手を見下して人のことを馬鹿にしたり、笑ったりする事だ。母の微笑みが「馬鹿にされた」と相手を勘違いさせてしまったのだ。文化の違いを理解することは難しい。不審者扱いされたくないのに、僕は微笑まない事にした。

今回のテーマ「おもしろい日本語」で僕が思いついた言葉は、「すみません」だ。僕の中で、「すみません」は「ごめんなさい」だと初めは思っていた。日本で暮らして、微笑みより聞こえてくるのは「すみません」、「すみません」、「すみません」ばかり、日本人は謝ってばかりだなあと考えた。例えば、人ごみで人にあたってしまった時に「すみません」という。それは相手に悪気があったわけではなく、人が多くて仕方がないこと、こちらが気にもしていない程度でも謝る。これは、僕から見ると謎だった。別に相手が気にしないのに謝る必要なんてないとも思った。

しばらくすると、「すみません」には謝るとき以外にいくつかの場面で使われている事に気がついた。例えば、レストランで、「すみません、お冷一つ」などの使われ方だ。人に呼びかけるとき、店員を呼ぶときや、知らない人に話しかけるときに使われている事に気がついた。

他にも、お土産をあげたら、「すみません、いただいていいんですか」などの使われ方もあった。自分がへりくだった、謙虚な姿勢でいう「ありがとう」とお礼の代わりに使われていた。

また、百円の買い物なのに、「すみません、千円しか持っていないのですが」などの使われ方だ。「お手数をかけますが」など、何かを頼むときに使われていることが分かった。相手を気遣う気持ちがそこにある事に気がついた。

日本で暮らして六一年が経った。僕も「すみません」を使いこなせるようになった。初めは、謝罪の言葉だと思っていた「すみません」が、意見や感情の食い違いにより起こる摩擦を軽減、日本社会の歯車を効率よく回すため、潤滑油のような役割を果たしていることに気がついた。おもしろい日本語で思いついた「すみません」は「マイペンライ」と同じだった。日本人にはタイ人ほどの微笑み、笑顔はないが、相手を気遣う気持ちはタイ人に負けないくらいあることも分かった。文化の違いはあるものの、人を思う心、気遣いは世界共通だ。